



プロジェクト対象地域の一つ、カホラ市。人口の92.5%がマム語を話す先住民農民だ。プロジェクト対象地域は標高が高く、一日の寒暖差が激しい山間部。子どもは呼吸器感染や下痢になりやすい

FIELD SKETCH

分析とチームワークで、住民とともに子どもの命を守る

グアテマラ南西部に位置し、人口の約9割を先住民が占めるケツアルテナンゴ県。その中でも特に先住民が多い地域で、JICAは「子どもの健康プロジェクト」を実施している。そこはグアテマラ国内で乳幼児死亡率が高い地域の一つ。そんな現実を前に、JICA専門家の指導を受けた地元保健スタッフは、基礎的なケアと問題の早期発見、適切な治療によって、幼い命を救おうとしている。

文 = 工藤 律子 (ジャーナリスト)

text by Kudo Ritsuko

写真 = 篠田 有史 (フォトジャーナリスト)

photos by Shinoda Yuji



グアテマラ
GUATEMALA

まずは意識改革を

海拔2500メートルを超える山間部。

「子どもの健康プロジェクト」の実施地域は、

一年中朝夕の冷え込みが厳しく、水不足に

悩む乾燥した土地だ。不衛生な環境下、多

くの子どもや女性がはだしで生活している。

そのため風邪や下痢になりやすいが、予防

の意識や知識が乏しく、また交通の便が悪

いたために、なかなか病院に行くことができ

ず、こじらせて重病になる人が多い。結果、

毎年何百人もの乳児(2004年は634

人)が呼吸器感染や下痢症で死亡していた。

「住民は地元の保健スタッフに不満を持つ

ていて、子どもを診察に連れて行きたがらない。まず保健スタッフの意識と態度を改善することが必要でした」

JICA 専門家の看護師、工藤美子さ

ん(60)が言う。工藤さんは05年10月からプ

ロジェクトを指揮。熱のこもった語りと細

かい指導で、地元の保健スタッフたちの

牽引役となってきた。

プロジェクト対象地域の6つの市には現

在、4つの保健センターと15の保健ポスト

がある。センターには医師、正看護師、数

人の准看護師、地域保健担当者、食品・動

物管理者が、ポストには准看護師が大抵1

人いる。彼ら保健スタッフは、もともと住

民の健康を気遣うのではなく、「国が方針として力を入れてくれる予防注射をすることはかり考えていた」と工藤さん。その意識を変えたのは、このプロジェクトだ。

「チームワークと分析の習慣」が力

人口約1万6000人のカホラ市の保健

センターで、地域保健担当として働くジユ

リッサ・ガルシアさん(25)は、工藤さん

の指導を受け始めてからスタッフ全員が変

わったと感じる。

「前は皆、自分の担当の仕事しかしませんでした。でも最近では、チームワークが大切

だと分かったんです。地域の世帯分布図を



5歳以下の子どもの「死の分析」を指導する工藤さん(右)。死亡した子どもが置かれていた状況を一つ一つ分析し、命を救うためにできることはなかったのか、細かく考えるよう、指導する



1歳2カ月の乳幼児の健康診断をするカホラ市保健センターの医師。異常を早期に発見し、重症になるのを防ぐためには、定期的な健診が大切だが、保健スタッフと住民に少しずつ理解されるようになってきた

プロジェクトをサポートする青年海外協力隊

プロジェクト実施地域では、助産師や栄養士、看護師などの青年海外協力隊が活動している。彼らはそれぞれの立場でプロジェクトをサポートする。

「読み書きができないお母さんが多いので、指導をしてもメモが取れない。だから、繰り返し伝える努力が大切なんです」

そう話すのは、標高2,800メートルの山道を片道1時間かけて徒歩通勤する看護師の三浦亜希さん(30)。まさに体力勝負の職場で、主に先住民言語を話す住民を相手に根気よく、子どもの健康管理を指導する。

2007年7月末に着任したばかりの本間真知子さん(24)は、まだ慣れないスペイン語でのコミュニケーションに苦戦しながらも、独自の教材を作るなどして、子どもの健康を守るために食生活の改善を図りたいと考える。

「低体重の子どもの家を訪問したり、伝統的産婆さんたちを集めて話をしたりして、栄養について伝えたいです」

常に人々の生活に寄り添う彼ら隊員の存在は、地域住民と保健スタッフにとって大きな安心と励みになるだろう。



手作りの教材を使い、栄養について説明する本間さん



プロジェクト対象地域には今も、寒暖差が激しく不衛生な環境にもかかわらず、はだして生活する人々がいる。住民同士のコミュニケーションが、ボランティアが身に付けた保健知識の普及に役立つ

プロジェクトは、「乳幼児が呼吸器感染や下痢症で重症に陥らない」という目標を掲げ、1歳以下の子どもの死亡数が25%減少することを目指してきた。が、このカホラ市では、目標の達成以上に重い意味を持つのは、保健スタッフの働きが良くなり、住民、特に女性が保健知識を身に付けて、子どもの健康管理を推進する地域ネットワークができたことだ。

工藤さんは強調する。「住民への医療は、住民が主体でなければ。だから保健ボストのような末端の仕事、役

主食のトルティージャの材料、トウモロコシ粒をすりつぶすパストルさん。ボランティアとして、薬草の利用法と子どもの健康管理に欠かせない「5つの基礎ケア(栄養、水分、衛生、体温のコントロール、休息)」を身に付け、近所の住民たちに広めている

「ドさんは「住民が私たち保健スタッフに信頼を抱いてくれるようになりました」と胸を張る。スタッフのサービスの向上は、住民の保健知識の向上にもつながった。「保健スタッフや専門家から学んだおかげで、近所の母親に子どもの健康管理や薬草の利用法を教えることができるようになりました」

「機会に恵まれなかった彼女にとって、ボランティアとして得た知識は人生の糧でもある。大勢の母親が、プロジェクトを通して子どものケアや薬草に関するトレーニングを受け、ボランティアとして活躍するようになった。

プロジェクトは、「乳幼児が呼吸器感染や下痢症で重症に陥らない」という目標を掲げ、1歳以下の子どもの死亡数が25%減少することを目指してきた。が、このカホラ市では、目標の達成以上に重い意味を持つのは、保健スタッフの働きが良くなり、住民、特に女性が保健知識を身に付けて、子どもの健康管理を推進する地域ネットワークができたことだ。

「私たちは初めて、自分の努力で子どもの命が救える、という体験を得ました。このモチベーションを失うことはないでしょう」

「次にはスタッフが、このケースから学んだことを挙げた。一つは、「診察」の重要性を薬局店員に指導してきたおかげで、母親は薬局の勧めでセンターへ診察に来たという事実。以前は診察を受けずに安い市販薬に頼り、病気をこじらせる住民が多かったが、保健スタッフが良いサービスを心掛け、薬局店員の意識を変える努力をすれば、診察に来る人は増えるということが実証された。また、死亡した子どもが異常にやせていたことを踏まえ、新たなサービスを始めたという報告も。

「栄養失調の子どものリストを作り、手分けして家庭訪問をしています。子どもの体調変化を早く察知すれば、病気の予防が可能ですから」



作る時も、皆で協力して取り組んだら、良いものができました」

同センターの医師、ラウル・マルドナドさん(60)も、「子どもが死亡した場合も、皆で状況や原因を分析し、どうすべきだったかを考える習慣ができました。それが予防にも役立っています」と成果を実感している。スタッフの連携が進んだおかげで、5歳以下の死亡率も下がった。

各保健センターは月に1度、その月に死



乳幼児の身体測定を行う看護師。一人で起き上がれるか、モノを口に運ぶかなどの質問を母親にする。センターを訪れる母が増え、異常に気付くために役立つ成長記録が取れるようになった

「子どもの命は救える」

プロジェクトが開始して2年。マルドナ



スタッフ全員が、プロジェクト開始からの約2年間を振り返り、活動を評価。得た知識や意識、技術を挙げ、それらを身に付けて実行し、考えることができたか、また、それらが定着、強化され、自主的に継続されていくためにはどうすればよいか、を話し合った

亡した5歳以下の子どもの「死の分析」を行うようになった。同センターでの「分析」の様子を見せてもらった。

「診察に来た時、その子はもう危険な状態だったので、お金を貸して、すぐ病院へ行くよう指導したんです。でも母親は病院へは行かず…」

ケースを担当したスタッフが、死亡経緯を説明する。それに対して全員が、診察のタイミングや家庭とセンターでのケア、病院に行かなかった理由など、気付いたことを挙げていく。それらを分析した結果、この子はすぐに病院へ行っていれば助かったのに、病院で死んだら遺体の引き取りにお金がかかると考えた親が連れて行かなかった、と分かった。

次にスタッフたちは、このケースから学んだことを挙げた。一つは、「診察」の重要性を薬局店員に指導してきたおかげで、母親は薬局の勧めでセンターへ診察に来たという事実。以前は診察を受けずに安い市販薬に頼り、病気をこじらせる住民が多かったが、保健スタッフが良いサービスを心掛け、薬局店員の意識を変える努力をすれば、診察に来る人は増えるということが実証された。また、死亡した子どもが異常にやせていたことを踏まえ、新たなサービスを始めたという報告も。



プロジェクトの2年間を評価し、スタッフが得られたと感じている成果を挙げたメモ